

J-20 の運用試験基地

漢和防務評論 20170404 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

J-20 の運用試験は、従来、最初の段階は滄州基地（河北省）で、後半は鼎新基地（甘肅省酒泉）で行われていましたが、今回 J-20 は最初から鼎新基地で運用試験を行っているようです。
漢和は保全上の理由からと推測しています。

KDR バンコク特電：

機番号が 7 で始まる 2 機の J-20 が 2016 年 11 月、鼎新飛行場（甘肅省酒泉）に出現した。J-20 は空軍に移行し、第一段階の運用試験が行われるようだ。しかし J-20 の運用試験が滄州でなく鼎新飛行場で行われることは注目に値する。通常、新時代の戦闘機の運用試験は、伝統的に滄州の戦術訓練センターに進駐して、教材作成編集、パイロットの訓練等々、初期作業が行われてきた。その後、鼎新に進駐して戦術訓練を行ってきた。鼎新では機種の異なる戦闘機との模擬空中戦、演習が主であった。

KDR がすでに報道したが地域経済の発展等で、滄州は空域が狭くなり、沿海に近く、日米の諜報活動が容易であることから、J-20 は最初から鼎新に進出した可能性がある。

別の可能性は、空軍が受領を急ぎ、保全上の観点から、滄州で行ってきた一連の作業を今後全て鼎新で行うことになったか？

空軍は、J-20 受領後、空対空ミサイル、その他戦術ミサイルの発射試験、その他の機種の戦闘機との共同訓練、など一連の試験を行わなければならない。KDR は J-16 の初期生産型がすでに鼎新に進駐したことを報道した。これだけでなく、J-20 は、地上指揮センター、その他の機種の戦闘機、KJ-2000、KJ-500、KJ-200 早期警戒機、高技術電子戦機とのデータリンク運用を試験し、聯合作戦ネットワークを構成しなければならない。

2016 年成都航空機会社は J-10C 型の少量生産を開始した。この機体は、主としてレーダー警報システム等、電子戦装置を改良した。またある説によると、J-10C が換装したのはアクティブ・フェーズドアレイ・レーダー (AESA) であるという。KDR は反復確認した上で、J-10B が使用しているのはパッシブ・フェーズドアレイ・レーダーであると報道した。もし J-10C が AESA に換装したのなら、技術的に大きな飛躍があったことになる。

J-20、J-10C は、2017 年に少量生産に入る可能性はある。

以上